

照 觀

8

特集 豊竹山城少掾の受領

藝能文化雜誌

昭和二十二年六月

十二人目の榮位、豊竹山城少掾藤原重房の名を秩父宮家から受領して歸來されるや、四月の文樂座は「名狂言記念興行」の看板をあげて櫓下を待つてゐた。二代目古靱大夫の名では最後の床である。

初日を待ち兼ねてゐた同人たちは、早速、谷崎先生と共に、久し振りの「寺子屋」に感激したが、床を下りて來た師匠を圍んで春のひさ背を過すといふ喜びをかされることができた。これは本誌特輯としても、こ

山城少掾を圍んで

よなき讀
ものにな
つたと思
ふ。

林 秀 雄
沼 艸 雨
大 西 重 孝
多 田 嘉 七
武 智 鐵 二
北 岸 佑 吉

—— 汽車を待たせる ——

多田 お疲れさまで。尤もわれわれはすつかりいゝ氣分になりましたが。

山城 何ぶん歸つて來て早々の初日なので、本當の調子が出ませんでした。昨今の汽車には全く弱ります。おまけに行きには列車事故にあひ、途中で降されました。

谷崎 私も近頃の汽車にはとても乗れない。東京へ行く用事も、汽船が出るのを待つてゐるのです。

山城 その代り、御殿場では五分間も汽車を待つて貰ひましたよ。秩父宮様の御前演奏をすませ、ニュース映畫に撮られたり、御馳走を頂戴いたしたりしてゐますと、六時何分かの終列車に間に合ひ兼ね

るやうになつた。驛から氣を揉んで早く々と電話が幾度もかゝつて來ますので、大慌てに馳けつけたのですが、とうとう發車を五分も遅らせてしまつた……。

北岸 そいつは特ダネだ。いや師匠の徳の然らしむるところでせう。この節では宮様の御威光と申すよりも……。

山城 その日は御殿場の町の有力者の方が三十人ばかりお召しをうけて、一緒に聽いて下すつたのですが、その中に驛長さんもゐましてね、これがなかなかの淨瑠璃好きださうで……、特別にはからつて下すつたわけですが、古靱一生の光榮です。

多田 藝術院會員にはそれくらゐの敬意を拂つてもいゝぢやありませんか。

谷崎 鐵道のバスはくれる筈ですが、勅任待遇だといつても全く何

にもないんだ。

山城 左様ですか。手前の所へは清水院長から丁重な御書翰を頂いたきりで辭令は未だに頂きません。(附記―辭令は五月三日に漸く送付された由)

―宮家との因縁―

谷崎 宮家では何を語られたのですか？。

山城 「道明寺」です。はじめ「熊谷陣屋」といふことだったので、宮様は「陣屋」を御勉強なすつていらつしやつたさうですが、「道明寺」に變つたので、又勉強しなほしたと仰せでした。妃殿下とも大層御熱心にお聴き下すつて、全く光榮に思つて居ります。すんでからも、寒稽古のことなどを御下問になり、清六さんは、冷たい水に手を浸しては三味線をひく話など私は太夫が海岸で聲をつぶすといふやうなことを申し上げましたが、

それは昔のことで昨今は致しませんと申しますと、お笑ひでした。我々のこともよく御承知ですし、お終ひには、京都では米の闇値が大變高いさうだが、などと至つて御氣さくにお話しました。

林 御殿場の御邸は確か元は井上準

之助氏の別荘だつたのですれ。

山城 私どもが仕度部屋に拜借した

のは妃殿下の御化粧の間らしかつたのですが、そこからは富士が眞正面に見えて大變いゝ氣分でしたが、御生活はなかなか御質素でいらつしやるやうに拜しました。丁度お臺所の傍を通りますと、兩殿下が色々御指圖遊ばされてゐるので勿體なく存じました。その御馳走を頂いたのですが、胡麻も味噌も粉も皆自分で百姓をして作つたのだよ、と仰せられて恐縮しました。

谷崎 秩父宮様とはどういふ御因縁

で？

山城 昭和六年八月に殿下が大阪においで遊ばしました折、大阪城の紀州御殿へ榮三さんと一同で上つて「太子」を人形と共に御覽に入れました。その前にも、大正十二年に、私は出ませんが、中央公會堂で「千本櫻」の道行を御覽のことがありました。それから昨秋の藝術祭に上京の歸途、御殿場で、「先代萩」を御聴きに入れましてから、今度で私としては三度目の光榮ですが、淨瑠璃には大層御關心をお持ちの御様子です。そのとき、元お附武官だつた人見氏や別當の吉田子爵など宮家の方々で受領名のことをお考へになつてゐられたやうで、丁度また花友會の吉田幸三郎氏や河竹繁俊博士らもお考へ下すつてゐたのが、圖らずも一つになつて實を結び、河竹先生が表向きに動いて實現して下すつ

た次第です。

— 藝のわかる宮様 —

武智 宮様の御署名はお貰ひになり
ましたか。

山城 受領名の御書きつけは

金杉彌太郎專

義大夫淨瑠璃藝名豊竹古朝太夫

今般山城少掾と稱す可き旨

御沙汰被下候事

昭和二十二年三月二十七日

秩父宮出仕

子爵 吉田良兼

と御座いますが、勿論殿下の御直筆ではございませんので、別に御署名を頂けますやうお願いしました。お聴容れ下さいましたからそのうちに賜はることゝ存じます。武智 櫓の看板にそれを彫れませんか。

山城 そんな大きなものには、どう
でせうか。

武智 寫眞で引伸ばしてやれば出来

ませう。前のは誰方の筆ですか。

山城 一條實孝公の御筆でした。攝

津大掾さんのは藤澤南岳翁だつた

と思ひます。

多田 こんどはひとつ谷崎先生に願

つたらどうです。大阪關係の文人

といふと、ちよつと他にはないぢ

やありませんか。

谷崎 駄目ですよ。私なんか、とて

も。そりやどうか御免蒙りたい。

北岸 藤澤桓夫君は南岳の孫ですが

若すぎる。

武智 ともかく、こんどの看板は吉

田幸三郎さんがお祝ひされるさう

です。吉田さんは河竹博士を表に

出して、自分は陰で運ばれたので

すが、宮家への御禮は師匠に代つ

て吉田氏が行かれます。

北岸 吉田さんは坪内博士の文藝協

會の第一回生で、「お七吉三」か

何かを演じられたこともあるので

すね。院展や、研精會、それに古

音曲全體の保護等に盡された功績
は類のないほど大きいのでせう。

武智 河竹さんが黙阿彌の吉村家へ

養子に行かれたのも坪内逍遙博士

から吉田さんに相談があつて決つ

たのださうです。吉田さんの令妹

が速く御舟氏の夫人なんですが、

以前、秩父宮様が院展で御舟氏の

「青丘婦女抄」といふ作品にお目を

さめられ、御所望になつたので、

吉田さんから宮家へ納められたこ

とがあるのです。

谷崎 さうですか。秩父宮に繪もお

わかりになる、つまり藝術のわか

つた方と申すべきで、この宮様か

ら受領されたのは、昔よりも意義

があるわけですね。

— 松葉を頂いた紋 —

林 隊位と一しよにお貰ひになつた

御紋はどういふのですか。

山城 宮家の御替紋が十四菊を松葉

がこひにしたものなので、それに

因んで、松葉を二重の龜甲で包んだのを頂いたので、紋帳にはないものです。

谷崎 大變感じのいゝ御紋ですね。

北岸 御披露の口上は、古例はやはり素袍ですか？

山城 大掾さんの時もさうでした。

こんども皆襟からお祝ひして下さいますので、素袍に侍烏帽子姿でいたします。それも吉川震方先生の御指導で有職の方にも間違ひないやうにして頂けるさうで、大へん名譽に思つとります。

沼 その姿ではお語りにならぬのですか。

山城 え、御挨拶だけです。

多田 先例にはないか知りませんが口上のまき、素袍姿で何か短いものを語つていたゞけたら……近松の「蟬丸」の道行かなんかを。

大西 それはいいですな。元祖義太夫の受領が「蟬丸」だつたんです

れ。だが大へん濼いものなんでせう。

武智 文樂ではとても我々の企劃を

ようやりませんよ。これは「山城を聴く會」の楽しみにまつといた方がよさうだ。

谷崎 素袍で語つて貰ふのもいゝな

——十二人目の樂位——

沼 受領といふのは櫓下に對して行はれたものですか？

武智 元は人形の細工人や座元に與へられたものだつたのが、後には大夫に與へられ、斯道最高の稱號となつたのですれ。

山城 宇治加賀掾は座元で金方でも

あり、同時に大夫だつたのです。また若大夫の越前少掾も、新大夫の肥前掾も同じです。大夫としては元祖の義太夫の受領が最初で、私は十二人目となります。

林 その十二人とは？

山城 順に申し上げますと、(1)元祖

義太夫が竹本筑後掾藤原博教を受領したのが元祿十四年で、(2)初代若大夫の豊竹越前少掾藤原重泰は、初め享保三年に上野掾となり同十六年に再受領されたのです。次に(3)江戸の豊竹新大夫の肥前掾清正の受領は享保年中とよりわかりません。(4)二代目義太夫の政太夫は享保二十年に上總掾と元文二年に播磨掾喜教と二世受領してゐます。(5)内匠大夫も延享二年に豊竹上野少掾、寛延元年に竹本大隅掾となり、更に寶曆元年に大和掾宗賞となりました。(6)初代此大夫の豊竹筑前少掾爲政は寛延二年、こゝへ(7)豊竹栲太夫の丹後少掾を入れます。これは、「聲曲類纂」に見えてゐます。(8)二代目土佐大夫は文政三年に竹本播磨大掾秀富となり、(9)五代目染太夫が竹本越前大掾明郷となつたのが嘉永元年、(10)私の祖父師

匠に當る壽太夫の二代目津賀太夫の竹本山城掾兼房が嘉永六年で、(II)皆襟御承知の二代目越路太夫が竹本攝津大掾藤原愛郷を受領されたのが明治三十六年でございませう。それで私は十二人目になるわけです。

北岸 本によつては元祖の筑後掾も少掾としてありますね。大掾と少掾、たゞの掾の順になるのでせうか。

武智 實際は少掾といふ方が皆名人なんです。それで古藪さんも……名宣りの方は若太夫の重泰の重と山城掾の兼房の房をとられたわけですよ。

多田 山城といふのは？

山城 代々が山城に因縁があつて、私も戦災後は京都に住つてゐるからのことゝ存じます。

大西 十三人目だといふ説もあるやうですが……。

山城 それは江戸の豊竹伊勢太夫といふ方が二代目肥前掾をついでおますからそれを加へるのでせう。

しかしこれは座元としての襲名ですから、太夫のとは趣が違つてゐるわけです。もう一人、塩町の師匠、三代目政太夫が播磨大掾と名宣つたことがあります。これは太夫としてでなく、よくお菓子司にもあるやうに、藥種商としての受領だつたので、三芝居だけで抹殺されたといふことがあります。この人は後に江戸へ下り、播磨太夫と改められたのですが、これも受領の太夫には加へません。

— 受領の太夫の風 —

林 受領された太夫について何ひた

いと思ひますが……。

山城 元祖義太夫や初代政太夫については今更申上げるまでもありませんが、大和掾は初代内匠太夫のことで、延享二年に上野少掾を受

領してから京都へ退き、竹茂大隅を名乗つておましたが、例の「忠臣蔵」の騒動で、招かれて竹本座に出た方です。再受領して竹本大隅掾となり、更に大和掾を受けたのです。節語りの名人で、ひらかな鐘場、戀女房十段目、役ノ行者三ノ切、姪ヶ小島三ノ切、双蝶々橋本、薄雪心中、安達三ノ切などが得意で、今に大和風として喧しくいはれてゐるほどです。

武智 「春日村」は確か土佐太夫の播磨大掾の初演で、その風が残つてゐるものですが、これも「山城を聴く會」で語つて頂きたいものです。

山城 「春日村」の初演は鳥太夫ですが、中途で土佐太夫になり、それが評判で本や何かには土佐太夫の名が出てゐるわけです。越前大掾となつた五代目染太夫は、石屋橋の染太夫といつて中興の祖とされ

てゐる四代目染太夫の弟子で、今日、染太夫風といふのはこの四代目の語り風を指すのですが、その弟子の三羽烏に三代目長門太夫と重太夫、それにこの五代目染太夫があつたわけです。

武智 私は淨瑠璃の本筋はこの石屋橋の染太夫から出てゐると思つてゐますが、一般に長門太夫が立派だつたといはれてゐるのも畢竟その師匠の四代目染太夫が偉大だつたからでせう。

—祖父師匠山城掾—

山城 山城掾といふのは私の師匠の法善寺の津太夫の師匠ですから、私には祖父師匠に當ります。チャリ語りの名人で、受領してから、「三國無双滑稽物語竹本山城掾藤原兼房」の大看板を掲げた人ですチャリ語りといつても眞物を十分にこなせぬと語れるものではありませんが、淨瑠璃の本筋を忘れ

た者には出来ないものです。語り物は何でもやれた人といふことで「竹中碧」や「阿古屋」などが得意だつたと承つてゐます。

北岸 木谷蓬吟氏の「文樂今昔譚」には「日本第一……」とありますが……。

武智 そらなつてゐる番付もあるやうですが、看板は「三國無双」です。

北岸 坊主頭で赤袴に赤い見臺で床へ上つたといふことですね。

武智 法善寺の津太夫が「岡崎」などを語つてもチャリが傳染つてゐたといひますが、その影響ぢやありませんか。

山城 さアそれは……。『三國無双滑稽物語』の看板は六代目綱太夫が見臺に直して使つてゐられました。綱太夫は非常な凝り性の方でこの看板に漆を入れたり、その頃は珍しかつた金モールの房をつけ

て、搖れるとサラ／＼氣持よい音がするやうにされてゐました。この見臺は四代目播磨太夫の手に移つてゐましたが、私が東京へ戻つて播磨太夫についてゐました際、手入れをしたり、寄席を廻るときに運んだりさせられたもので、後に廻り廻つて私の手に入ったのですが、惜しいことには戦災で焼いてしまひました。若し残つてゐたら、今度の披露に使ふのに大へん意義深いことでしたのに……。

—攝津大掾のこと—

大西 受領の太夫でも攝津大掾になること、我々實際に聽いてゐない年代の者でも、あの福々しい顔で烏帽子素袍姿の寫眞を見て親しんでゐますが、「中將姫」や「先代萩」の御殿などが十八番だつたのですね。

山城 高いところがどこまでも高く出るといふ立派な調子で、美しく

艶のあるところが當時の人氣に投じたものでせう。何しろ甲(カン)の一つ上まで聲が出た。三味線のケの上のエ、そのも一つ上のサまで樂に出て支へなかつたのです。しかし、正道の淨瑠璃で最後の人といはれてゐます五代目春太夫のお弟子ですが、御本人は師匠のやうな淨瑠璃は聲が違ふので語れないといはれてゐました。明治四十五年、私が三十五歳の時、大掾さんが松屋町の廣助さんの絃で一世一代の「九段目」を語られました。が、今度はどうにか本藏の詞が語れるやうになつたといつてゐられました。大掾さんはこのとき七十一歳で「九段目」は九回目の役だつたのですが、私はこの言葉を感じたものです。先代の大隅太夫は難聲で擱へて抛り出すやうな語り口でしたが、大掾さんは美聲で

人それぞれの人物を聴かさうとされてゐました。例へば「野崎村」の「跡に娘はアアー」の件は、大隅さんだき太くゴツ／＼した聲で娘の情を聴かせてゐられたのは反對に、大掾さんは娘らしく優しく語られるのが特徴でした。

武智 今も話に出たやうに昔は大掾の「中将姫」「酒屋」「御殿」といふと、津太夫は「天王寺村」「白木屋」「鰻谷」といつた具合に太夫の得意の語り物はその人のために大それた事にとつておかれたので、一度語ると四五年せれば再び廻つて來ない。それで「今度は攝津の御殿だ」「津太夫の鰻谷だ」と市中の人氣が立つたわけですね。

山城 そうです。ちゃんと賣物の太夫の出し物が決つてゐました。當今では立狂言が出なくなつて、みどり式の狂言を並べるので、どんな太夫でも三段目、四段目を語る

やうになつてゐますから、一年たつた間に「堀川」が二度出たり、太夫さへ變へたら同じ狂言を繰返してもよいといつたことになるのです。

―「陣屋」と「日向島」―

林 受領披露の語り物は「熊谷陣屋」ださうですね。橋下披露の時も、「陣屋」でしたが、十分自信を持たれてゐる狂言なんですね。

山城 別に自信といふわけではございませんが、一昨年二月にこの「陣屋」を語りまして直ぐ文樂座が焼けたのですから、焼けつ放しにしておくのも残念に思ひまして……

大西 東京の安藤鶴夫君は津太夫の「鎌腹」に對して師匠の「陣屋」が最もよく師匠の特徴を出したものだといつてゐます。

武智 「一念彌陀佛……」のころなんか全くよろしい。

山城 あれば下駄屋の春子太夫さん

に教はりました。朝五時に起きて住吉から北久寶寺のお宅へ十日程通ひました。尤も私の工夫も加へてゐます。あすこはお客様も退屈なさるのぢやないかと思ひますが

武智

いゝえ、あゝやられるから、

「十六年は一昔——」が語れるのだと思ひます。道八の話を鴻池さんから聞いたのですが、何處で稽古して貰つたのだらうと不思議がつてゐたのが春子太夫と聞いて、あれからあんな淨瑠璃がよく出来たものだと思ひました。

大西 懸案の「日向島」も出して頂

きたいですな。

山城 あれば謠の「松門」の所でひつかゝつて巧く行きませぬので。

沼 いや、淨瑠璃の謠としてなかなか

結構ですよ。本行も誰かに稽古なすつたではありませんか。

山城 謠では以前「八犬傳」の示現の段に「井筒」の謠が出て來ます

ので、近所の謠曲の先生の所へ行きました。が、淨瑠璃には淨瑠璃の謠があるだらうといつて教へてく

れませぬ。いま一軒の先生の所でも同じ理由で斷られました。三軒目によつと聞かせてだけは貰ひましたが、本行は本行で、淨瑠璃は淨瑠璃らしく語るやうにと注意されました。「松門」の謠のところは、先代の大隅さんは大きな聲で出られましたが、謠の方は聞えぬくらゐに低く出られるやうでございませぬ。

武智 金春では大きく謠ひますよ。

沼 松本長さんのお聴きになつたのではありませぬか。景清は大口をはいて床几にかけてゐたんでありますせんか。

山城 さうでした。

沼 それなら松本長さんでせう。觀世、養生では寫實的になつてゐますから低く謠ひます。

山城 「日向島」も朱の入つたよい本を東京から手に入れましたから、死ぬまでには是非語つてみたいと思つて居ります。

— 人形からの注文 —

多田 人形遣ひから太夫へ注文を出しますか？

山城 太夫は大體、人形に動きの餘地を與へるやうに語るの、それに合はすのが人形の責任です。あんな淨瑠璃では人形が使へないといふやうなことを影ではよくいつてゐるやうですが、ちゃんと相談しかけてくれればよろしいのです。

武智 人形も遣へないのに注文だけ多くては……。榮三さんがいつてましたよ、人形がかつかへてゐるのは文五郎さんだけですつて。それが玉造や玉次郎がゐる時分の話ですから。

大西 近頃人形遣ひの掛聲が多くなりましたね。榮三さんが亡くなつ

てからひどくなつた氣がします。
山城 まるで人形にきつかけをして貰つてゐるみたいで、しかも長びいた間の抜けた氣合では、こちらがやれたものではありません。

北岸 人形の足拍子の入るところも今の調子は、あれでよいわけではないのでせうね。

山城 人形の方も、もう少し淨瑠璃の文章を研究してくれるとよいのですが、先達でも「葛の葉」の段切れで、屋體に庄司夫婦が居て、船底の保名と姫とが挨拶して別れて行かうとしますので、それは、「明けなば夫婦童子をつれ尋れて來ませ」と明けの日行かうといふので今別れるのではないと注意したのでした。

谷崎 地唄の「雪」で「凍るふすま」といふ文句で、山村だと襖をあける型をしますが、とんでもないことですよ。

北岸 大夫の方の注意は勿論でせうが、外部の批評も採り入れる雅量がなくちやいけませんね。

谷崎 すつと前ですが、志賀直哉君が六代目と吉右衛門の芝居で、吉の演り方を仰山すぎるとか何とか話してゐたのを、丁度隣の席に吉右衛門の家族がゐて聞いてゐたんです。志賀君は知らないから悪口をいつてゐたんでせうが、それで早速、吉右衛門は演り方を直したといふことがあります。いゝ話だと思ひましたね。

― 語り口で變る首 ―

山城 人形は以前は非常に權威のあつたもので、大塚さんの受領披露のときのことですが、先代の大隅さんが久々に復歸して「壺坂」を語られました。寫實な語り口ですから、すつかり文樂のやり方とは違つてゐて、水に油とは全くこんなことかと思つたほどですが、こ

のとき、大玉造の遣つた澤市を見るのと、「又平かしら」なのです。澤市は「老けた源太」のはすなので大隅さんがこれを指摘すると、「お前の語る澤市はこれで結構だ」といはれました。大隅さんのゴツゴツした語り口が「源太かしら」に合はないといふわけです。

大西 語り口でカシラが變るといふのは、威程面白いことですね。尤も最近のやうにカシラが壊れてしまつてゐては出来ないことですが、**山城** 私などはカシラを見て、これは自分のものでないと辟易するところがあります。「忠臣藏」の三段目を語りました時、師匠は「大舅」といふカシラですが、こんな重い淨瑠璃は自分には語れないと思ひました。

武智 でも先達での「古觀を聴く會」で聴かせて頂いた三段目は大變結構だつちやありませんか。

山城 いやいごうも……。人形の権

威のあつた話でもう一つ、「毛谷村」の一味齋屋敷を路太夫が語りました時、「行きやれ」で橋頭となるのですが、その日はどうしたものが橋が入らなかつたので、路太夫が自分でチョーンと口で橋頭を入れたのです。後で玉造さんが「あれは毎日お前がやるのか」と難じられ、路太夫さんは閉口されたことがあります。

—音づかひと聲色—

武智 これは湧池さんの「道入藝談」にも出てゐないことですが、道八さんは、古軼さんの方が越路太夫よりも、音が遣へるだけ太夫として上ですといつてゐましたが、音遣ひについてはどうお考へですか
山城 義太夫では顎、舌、唇、鼻、齒で音を遣ふと申しますが、私はやつと唇を顎くらゐがわかつて来ただけで、まだ齒とはどういふも

のか見當もつきません。

武智 顎といふのはデリケートな音つかひで、師匠の得意のところだせう。

山城 大塚さんは聲をふつてはいけない、振つては唄をうたつてゐる感じだから、聲を廻さればいかんといはれてゐました。

林 廻はずと上品に、ゆつたりと聞えるのでせうね。

山城 師匠は語り出したら、圓を描くやうにまんまるく歸つて来られたものです。一段を語るのに、初日に一時間五分かゝつたとしますと、二日目からは一時間で、あとはきちんと決めてゐました。途中でひつづけるところが違つたりしてどうなることかと思はせても、時間いきちんと同じになつたものです。

北岸 子供の聲や若い娘の詞は聲色で唄ふやうに語るのは邪道なんで

せうね。

山城 聲色でなく、情合で語り分けるべきだと存じます。その太夫の持つ聲のまゝで、情合で子供なら子供に聞えたらよいので、それが義太夫の本領でせう。聲を變へることはそんなに難しいものぢやありません。

谷崎 浪花節の雲月をラジオで聞いたのですが、はじめ幾人かの掛合かと思ひました。浪花節なら、あれが大きな魅力でせうが、あれはまるで曲藝みたいですね。

沼 雲月は七つの聲を持つてゐるといはれ、本當の能や義太夫を知らぬ人が感心するのです。

山城 大體、淨瑠璃は五畿内の人でないさやれないものとされてゐますのは、この詞のなまりがあつてはいけなからで、國の手形は、私どものやうに關東の者はなまりだけはどうにもなりません。

北岸 それでも、師匠のは、普通の
お話は江戸ツ子ですが、淨瑠璃は
すつかりなまりを克服されてゐま
すのに敬服してゐます。

山城 長尾太夫も江戸ツ子だつたも
んですから、なまりに大變注意さ
れ、本には上げ下げの印がいつば
いつけてありましたが、子供にま
で注意させてゐて、なまりを見つ
けると、うざんとか大福餅なごな
褒美にやるさうふやうなことをさ
れてゐました。

— 古靱の風、山城風 —

武智 師匠の淨瑠璃には、私ば一個
の風格が出来てゐると思ひます。
播磨や染太夫や大和といつた「風」
と同じ意味で「古靱風」——今度
は「山城風」といはればなりませ
んが、その山城風といつたものが
出来つゝあります。

大西 先年、土佐太夫が引退し、津
太夫が亡くなつた頃、私の友人な

んかは、古靱一人の交樂へはもう
行く氣がしない、といつてゐたも
のですが、明治から大正、昭和と
移り、しかもこの間に大戦といふ
大きな試練期にぶつかりながら、
この三代を通じて正しい淨瑠璃を
語つて來られた師匠には、他の太
夫に見られない偉大さがあると思
つてゐます。

北岸 今の話とは反對に、津太夫、
土佐太夫、鏗太夫、駒太夫と揃つ
てゐた頃よりも、却つて古靱太夫
ひざりに魅力を感じたといふこと
がありますよ。師匠は確かに時代
に合つた淨瑠璃を語つてゐられま
すから。しかもそれが時代と共に
に動いてゐる。丁度榮三さんの人
形と最もよく合つたところのある
のが何よりの強みだつたと思ひま
す。

大西 私は師匠ほど淨瑠璃の風を尊
重される太夫はないと思つてゐま

す。しかもそれが固定させずして
常に時代の人の感覺に清新さを與
へてゐる點を強調したいのです。

武智 先代大隅太夫の風といへども
今日の好みに合ふかどうかは疑問
でせう。私は津太夫の淨瑠璃な
ごは軍國主義的なもので、民主主
義的に人間を語り生かした太夫は
初代政太夫の二代目義太夫、石屋
橋の染太夫、それにわが山城少塚
の三人だと思つてゐます。

— 暗さと明るさ —

林 師匠の藝には、一部では、遊び
がなさ過ぎる、娯樂性が乏しいと
いふ見方がありますが、どうでせ
う。淨瑠璃が陰氣すぎるといふの
です。

武智 そんなことはない。私は東風
の「先代萩」御殿を聴いた前月に
西風の「加賀見山」長局を聴いて
ゐたのでしたが、これが同じ太夫
かと思ひました。後見送り

て政岡」の一節、ギンにたゞよふ音遣ひが、バツと花の咲いたやうに明るさを感じ、しかもそこに御殿の貫録が立派に語られてゐるのでした。結局、師匠の淨瑠璃は風格をつかんでゐるから、暗いときは暗く、明るいときは明るく聞えるのですよ。

大西 「堀川」などは意識して暗くされてゐるのですか。

山城 與次郎は貧乏人だからといふ人もありますが、陰氣くさいものは尙陰氣に、意固地に語るべきものと思つてゐますから。聽かれる方は賑かな方がよいのでせうが、三味線はハンナリやり、太夫は陰氣にやる。太夫が暗く語るときは絃が明るくといった具合に反對の手がついてゐるものです。

北岸 今まで格を正しく語られなかつたから、師匠の格正しい淨瑠璃がよけいに強く感じられて、そん

な批評が出るのでせう。

沼 語るよりも唄ふのが今日の風でせうが、あれは女義の流行つた弊害でせうね。そんなのは二流三流の人にまかしておいて、槽下は斯道の象徴なのですから、うんま眞物を語つて貰ひたいものです。

— 情合と泣き笑ひ —

武智 「妹春山」の山の段で大判事が「倅を殺す刀は五十年來知らざりし」といふところはこの一段中の眼目ですが、こゝは榮三の人形が實に立派で、床も人形に教へられて初めて正しく語れるのかと思つてゐましたが、「古戦の會」で聽かせて貰つて、これなら人形は必要でないと思ひました。結局、榮三も山城も行き着くところは一つだといふわけです。

林 戯曲の内容を理解される力が鈍くて、しかもその表現が適確なのです。

大西 正統な淨瑠璃を語られながら自然に無意識に近代化されてゐるやうに思ひます。

沼 「入れて語れ」といふことがありますが、謡曲でも「入ル」といふのは心持を入れるといふので同じだと思ひます。師匠のやうに情合が十分に語れてゐるのは他に類がありません。やはり人間的な苦惱を経て來られたからでせう。

武智 今日の「寺子屋」で「持つべきものは子なるぞや」など、師匠にして初めて語れるところと感心しました。

谷崎 實によかつた。それから、あの泣き笑ひに敬服しました。實はBKから三宅周太郎さんと文樂に關する對談を放送した時に、淨瑠璃の泣いたり笑つたりするところが不自然だといひましたが、今日のを聴いたらどうしても取消さなぐちやいけません。

山城 いろいろお褒めの言葉を頂い

て全く恐縮に存じますが、淨瑠璃はその日その日の調子で、床をア
ン廻して出た時に、スーとお客様
の心を自分の方へ引寄せられたと
思ふ時は素直に巧くゆきます。今
日のこゝのところを明日もかう語
らうと意識しても、さて翌日にな
ると、なかなか思ふやうに出来る
ものではありません。

谷崎 氣にするさ却つていけないの
ですれ。上山草人が「ヴェニス
の商人」でシャイロツクをやつたと
き、證文を破くところで笑ふのが
大變よかつたので褒めてやりまし
たら、翌日はもう笑へないんです
よ。

山城 また、何げなしに語つてゐる
とき、その語り方が不意に會得で
きることもございます。今日も源
藏の「いふに思はず振りあふぬき」
といふところで、こゝはかう語る

ものだナアさいふこが初めてわ
かりました。今までは別に改つて
「思はず……」と語つてゐたのです
が、今日はフツと見上げるといふ
氣分が我ながら語れたやうに思ひ
ます。こゝらのことが一生の修業
といふのぢやないかと思ひます。

— 亡き夫人の功 —

多田 先日お亡くなりになつた奥様
が今度の榮えの床をお聴きになれ
なかつたのは何より残念に存じま
す。

山城 自分でもあきらめて居りまし
たが、丁度東京から吉田様を受領
がいよく確定した旨の御手紙を
下さいましたので讀み聞かせまし
たところ、安堵したのでせう、そ
の翌日の二月十二日に至極安樂な
往生を遂げました。次から次へ子
供を亡くしましたし、家事一切は
女房まかせで、苦勞させましたが
……。

沼 重なる御不幸にも打のめされる
ことなく、今日の如き立派なもの
をつくり上げられたのは、全く奥
様の内助の御力も大きかつたと敬
服してゐます。

大西 戦争末期から終戦後へかけて
師匠ほど元氣な藝術家はないと、
誰もが評判してゐます。文樂がい
つ焼けてしまふかも知れないとい
つた情勢になりました昭和十九年
の末から「菅原」の二段目、三段
目、四段目と順次に語り、最後に
「陣屋」を無事に勤められて、その
翌月の昭和二十年三月に文樂座が
焼けたのですが、當時師匠の御決
意の垂々ならぬものゝあるのを拜
察して、毎度感激しながら聽かせ
て貰つてゐたものですが、全く感
慨に耐えません。それではどうも
ありがたう存じました。谷崎先生
にも大變失禮でございました。